

スポーツ文化の再生産に関する社会学的研究 －学校運動部を中心に－

山 本 順 之

1. 緒言

2004年国士舘大学サッカー部員15名による集団淫行という不祥事が発覚した。これまで、日本のサッカー界の先駆的立場であり、1980年代から2000年初頭にかけて、全国制覇を6回も成し遂げた強豪校であった。また、全日本大学サッカー連盟の推薦を受けJFL^(注1)に参加するなど大学サッカーの新たな可能性を見出した。しかし、そのような不祥事により、サッカー部の無期限活動停止、部長の辞任、JFLからの退会など処分を受けた。さらに、この不祥事がきっかけとなり運動部の管理体制における問題も指摘された。当時200人を超える選手に対して、指導スタッフが適正に配置されていないとされ、選手25～30名に対して1人の指導スタッフの配置が適正とされるなど、管理体制に対する問題も浮き彫りとなった。また、それを前後して、2004年の亜細亜大学野球部員による集団痴漢行為や2005年の京都大学アメフト部員による集団強姦事件など次々に報じられた。その後、2010年までに、大学運動部の不祥事は、薬物、詐欺行為、婦女暴行、AV出演、強盗など様々報告された。そして、その事件の多くが単独の犯行ではなく、集団によるものであった。特に新しいものでは、2009年京都教育大学の学生による集団準強姦事件や2010年佛教大学野球部員による当たり屋行為などある。そして、これらの事件も集団によって引き起こされたものであった。

このような大学運動部の集団による事件が頻発してきたのは、大学運動部の構造に問題があるのではないだろうか。これまで、大学運動部の不祥事は体罰や暴力を中心とした上下関係による指導者から選手への体罰や暴力行為、または上級生から下級生へのいじめや暴力行為などが問題となっていた。しかし、近年、問題となってきたのは、以前のような問題も無くなってはいないが、「タテの人間関係」によるものではなく、「ヨコの人間関係」に関わる問題となっているように思われる。それは単に、谷口⁽¹⁾が言うような上下関係による暴力の再生産構造の問題ではなく、中根⁽²⁾が言う「ヨコの人間関係」と密接に関わっている。確かに、運動部における人間関係は上下関係に代表されるような「タテの人間関係」によって構造化されているが、実際には、この「タテ」と「ヨコ」の人間関係が密接に絡みながら形成されている。そして、その構造の中で、人間形成や人格形成といった人間教育、競技力を向上させるための技術や戦術の技術指導が行われる。さらに、そこでは、運動部の規律や規範、チーム戦術といった、その集団固有のイデオロギーが受け継がれていく。このような伝統の伝承を谷口⁽³⁾や高橋⁽⁴⁾は暴力の再生産構造と呼び、そこで育った学生が指導者になり暴力を誘発すると言う。それは、日本体育大学の「エッサッサ^(注2)」の伝播と類似しており、暴力行為だけでなく、身体的文化の伝承とも言えるだろう。

しかし、今日問題とされる運動部の集団による犯罪行為は単に「タテの人間関係」による再生産構造ではなく、「ヨコの人間関係」とも密接に関わっているように思われる。つまり、運動部の再生産構造には「タテ」・「ヨコ」の両方の機能が必要であり、そのどちらかが欠けても機能しない。そして、その「タテ－ヨコの人間関係」の距離が今日のような問題を引き起こしているのではないだろうか。特に再生産構造における「ヨコの人間関係」の距離に関わっていると考えられる。

そこで本研究では学校運動部における伝統の伝承、イデオロギーの再生産の構造を明らかにし、今日頻発する集団の問題の究明に活路を見出す。

そのために、学校運動部の構造を歴史的観点から考察し、その役割や特性を明らかにする。また、大学運動部が人間教育や文化の再生産において重要な役割を担う可能性に言及する。

2. 伝統とは

「伝統」と聞くと、職人による技術の伝承や古典芸能の伝承などいわゆる技術の伝承を想起するであろう。池田は伝統を「ある集団、階層、階級が歴史的に形成し、もしくは受容し、長らく再生産し、共有している一定の思考様式や行動様式をいう。したがって、伝統は文字や記録によって伝えられた文化の伝承、また、価値判断を伴わない習慣とも相違する⁽⁵⁾。」と定義している。また、広辞苑では「ある民族や社会・団体が長い歴史を通じて培い、伝えてきた信仰・風習・制度・思想・学問・芸術など⁽⁶⁾」としている。そして、久保は伝統を「単なるオートメーションを示すのではなく、そのモメントである『伝える』と『受け継ぐ』との間に価値判断を伴うものの⁽⁷⁾」と述べている。つまり、伝統とは価値判断を伴うものであり、その集団固有のものである。そして、それは、学校運動部においても同様に伝統が形成されている。特に、大学運動部においては、様々な伝統が存在している。

1) 運動部の伝統

大学の伝統において最も有名なものは日本体育大学の「エッサッサ」ではないだろうか。これは大学の伝統的応援スタイル及び体操である。大学生活において、新入生特別活動（前期授業の一環）で徹底的に教えられる。習得した後は各部祝勝会等で凱歌として披露される事が多い。

また、東京農業大学の「青山のほとり」、通称「大根踊り」も有名である。これは、「エッサッサ」とは異なり、応援団である東京農業大学

全學應援團が大根を持って歌いながら応援を行うことに由来している。東京農業大学全學應援團という名前が示している通り、「全学」、すなわち全学生によって組織されることとなっており、かつては農大に入学した学生全員に対し「青山ほとり」の歌詞と踊り方を覚えさせていたが、現在は一部の学科を除き、覚えさせるということを行っていない。しかし、農大の象徴ともいえる存在であり、現在でも学生の飲み会から卒業生の結婚披露宴や葬式など、さまざまな場面に歌い踊られている。とりわけ、農大卒業生の結婚披露宴では出し物として友人の農大卒業生による演技が定番となっており、常磐松時代の風景や農大健児の意気を謳った1番と農大生或いは農業従事者との結婚を勧める4番が主に歌い踊られる。

東京農業大学全學應援團による応援時や結婚披露宴での出し物など正式な場での踊りでは、当然、大根が使用されるが、正式な場での踊りではない場合、大根をビール瓶やペットボトルなどの棍棒状の物で代用して歌い踊られる。また、東京箱根間往復大学駅伝競走では、全學應援團の応援を見るために来る観客もいる。

また、運動部における伝統とは、その運動部固有の習慣化されたものである。そこには、運動部に帰属するための、規律や規範といったものから、技術的・戦術的なものまで様々である。そして、それらをその集団固有の伝統として受け継いでいく。つまり、近藤^⑧が言うように、運動部の伝統とは「運動部の組織化が進むにつれて、その集団独自の習慣、きまり、グループモラルが成熟し、伝統として理念化」を意味している。

しかし、運動部における伝統は、これまで社会的問題となってきた。それは、運動部の伝統が一般社会から隔絶し、問題を引き起こしてきたからである。

2) 運動部における非日常的伝統

わが国の運動部の構造は日本人固有ともいえる「タテの人間関係」と「ヨコの人間関係」によって構成されている。「タテの人間関係」では封建的関係を象徴する先輩―後輩の上下関係、「ヨコの人間関係」では、「われわれ意識」や「連帯責任」というものが存在する。かつて、この上下関係を身分制度になぞらえ「4年神、3年天皇、2年平民、1年奴隸⁽⁹⁾」なる言葉を生み出した。そして、その言葉通り、上級生の言葉は絶対的なものであり、下級生は理不尽であろうと絶対的服従を強いられてきた。そこでは、1年生の面倒は2年生が、2年生の面倒は3年生が、というような先輩が後輩を面倒見る、指導するといった構図が出来上がっていた。そのため、1年生の罰は1年生だけでなく、2年生も罰を受けるというようなこともあった。しかし、このような非人道的とも思える制度ではあったが、人間関係を形成する一助となっていたことも事実である。それはイギリスのパブリック・スクールにおいてプリーフェクト―ファッグ制度⁽¹⁰⁾が同様な意味を持っている。また、このような閉鎖的な集団の中ではその集団の中で行われる行為がその成員の中に一般化されてしまう。ル・ボンは「人間集団は、それを構成する各個人の性質とは非常に異なる新たな性質を具える。すなわち、意識的な個性が消えうせて、あらゆる個人の感情や観念が同一の方向に向けられる⁽¹¹⁾。」と述べている。このことは、運動部において、個人や個性を消失させ、すべてを同質化させている。すなわち、上下の関係の中で絶対的服従を意味している。そして、そのような構図が運動部では横行し、いわゆる体育会系とは、絶対服従、年功序列といったイデオロギーの代名詞となった。ある大学の運動部では、「入学後、1年生は全員丸坊主にななければならない」や「授業へは指定されたジャージで行かなければならない」など、ある種の軍国主義のような決まりを作り出していた。また、上級生の使用した練習着やユニホームを下

級生がそれぞれ担当し、洗濯や翌日の練習前の準備など付き人のような役割をさせられることもある。このように、運動部には一般社会では否定されるような様相が当たり前のよう存在し、そのようなことが運動部の中では一般化されている。

3. 大学運動部の歴史

1) 運動部の構造

大学における運動部の多くは、各大学の中で任意の団体のサークル活動として位置づけられている。そして、その組織は部長や顧問を筆頭に副顧問、監督、コーチ、選手から成っている。また、大学のスポーツ系サークルの中には学校指定の強化サークル、指定サークル、一般サークルのような区分がされ、部費や活動費の差や推薦入学生、特待生といった入試制度や奨学生の枠が設けられている。近年ではスポーツ系サークルの活動を大学の広告塔や学生募集の戦略として用いる大学が増えてきている。中学校や高等学校においても、当初部活動は課外体育として位置づけられており、1958年の学習指導要領には特別活動の1つとして付記され、1972年、1973年改定の学習指導要領からクラブ活動（必修クラブ）は特別活動の一領域とされた。そして、1992年、1993年改定の学習指導要領では「部活動への参加を持ってクラブ活動の一部または全部の履修に変えることができる」と明記された。しかし、2002年、2003年改定の学習指導要領では必修のクラブ活動は廃止され各校の実態に応じて、課外活動の一環として部活動が行われるようになった。

大学においては、課外活動として位置づけられており、一般に学生自治会の下に体育会や文化会などの自治組織が設けられ、その自治組織に所属して活動が行われる。また、大学運動部は日本のスポーツの先駆的役割を担ってきた。野球やサッカー、そしてラグビーなどの競

技は大学を中心に発展してきた。野球においては第一高等学校（現東京大学教養学部）、サッカーは東京師範学校（現筑波大学）、ラグビーは慶應義塾大学が日本のスポーツの先駆者であり、各大学のクラブがその後の伝播に寄与した⁽¹²⁾。そして、大学スポーツは大学連盟と呼ばれる組織を中心とした様々な大会や活動、または各種競技団体（大学サッカー連盟、JOCなど）のもとで活動を行ってきた。

このように大学運動部は、わが国スポーツの先駆的役割を担うとともに、学生が主体となり発展してきた。しかし、今日では、スポーツを手段とした教育活動や宣伝・広告塔としての役割、さらには経営のための一手段として用いられることがある。特に、経営的・運営的側面から大学スポーツが地域貢献事業の目玉として用いられることが増加してきている⁽¹³⁾。

2) 運動部の機能

大学運動部の位置づけは各大学によって異なることは言うまでもない。そして、その機能も多様である。特に大学運動部が大学経営の一助となっていることや、学生の自主性や自立性を養うための機能、地域貢献事業の一翼を担う機能、さらには運動部の活動を通して、人格形成や人間教育を行う場としての機能などが挙げられる。それは大学が運動部に経営的・教育的な効果をもとめ意図的に手段化していると言える。

本来運動部は学生の自主的・自立的活動を基本とし、大学やその良俗の倫理を逸脱しない活動であれば大学からの干渉は受けないはずである。しかし、大学によっては、クラブ活動を大学公認の団体として位置づけたり、非公認団体としての組織として位置づけており^(注3)、実際には大学内の組織団体であるため、大学からの制約を受けていることは否めない。つまり、大学の運動部において制約の度合いが高くな

るのは、いわゆる大学の公認や強化・指定の運動部である。それらは、組織・運営面の制度化が求められ、大学内の教職員の協力による部長や顧問の設置、現場指導における監督やコーチといった指導スタッフの設置、大会や練習の活動報告、部員数や部の規約など多様な面で管理を受けている。その一方で、そのような運動部では、多額の部費の分配やスポーツ奨学生（特待生制度）の人数やスポーツ推薦入学者の人数など様々な面で優遇される。

また、近年では大学がスポーツを地域連携事業として活用する例や各運動部が独自に地域交流や地域連携を行う例も増えている⁽¹⁴⁾。特に福島大学の「福島ユナイテッド」や鹿屋体育大学の「大隅NIFS」、早稲田大学の「早稲田クラブ」、福岡教育大学の「Genkaiアスリートクラブ」など、多くの大学が地域連携事業を行っている。また、関西大学サッカー部が行っているサッカーフェスティバル大会では、高校生を対象に関西大学サッカー部員による企画・運営・指導を行うことで学生の自主性や自立性を養うための場を作り出そうとしている。

このように大学運動部には様々な機能や役割を担う可能性が広がってきた。そして、ここで行われる活動は単に技術的進歩だけを目指すものでなく、人格形成・人間教育といった機能と、母体となる大学の経営や存在意義を高める機能を持っている。しかし、近年、そのような機能とは対象的に大学運動部における問題が顕在化している。特に暴力に関わる問題・事件が頻発している。それは、大学運動部がそのような問題を誘発する要因を作り出しているのかもしれない。もしくは、これまで、そのような問題を隠蔽してきたものが浮き彫りになっているだけなのかもしれない。いずれにせよ、問題を引きこしている運動部にそれらを生み出す作用が存在している。そして、そういった問題は運動部の体質に視点が向けられている。

4. 運動部と日本人的特性

運動部の特性として最も顕著なものは「指導者－選手」、「先輩－後輩」といった上下関係、いわゆる「タテの人間関係」と、学年を中心とした「ヨコの人間関係」である。後者は「われわれ意識」や「連帯感」という言葉で括られることが多い。特に、問題を起こした1年生に対して罰する際や、チーム内の誰かが問題を起こし、チーム全体として罰せられる際に用いられる。これらの「タテの人間関係」と「ヨコの人間関係」が部活動の中で構造化されている。そして、この「タテ－ヨコの人間関係」は時として様々な問題を生み出す要因ともなる。「タテの人間関係」においては、指導者や上級生による体罰やいじめ問題、「ヨコの人間関係」においては、負の連帯ともいえる集団による問題である。特に、2004年の国士舘大学サッカー部による集団強姦事件や、2006年に日本体育大学サッカー部が集団キセルした事件などは、まさに負の連帯の現れである。つまり、運動部という集団による連帯が犯罪行為に対する善悪の判断を逸し、非倫理的行動に走らせてしまう。また、近年引き起こされた運動部の不祥事は、「タテの人間関係」の問題ではなく、「ヨコの人間関係」に関わる問題となっている。

これまで、運動部の問題といえば体罰やいじめといった部内における「タテの人間関係」によるものであったが、今日では外向的な犯罪行為が多く見られる。土居は今日の日本社会における構造の変化として「タテの人間関係」の消失を挙げている⁽¹⁵⁾。また、近年、学校運動部にも、いわゆる「クラブ育ち⁽¹⁶⁾」の選手の増加や、上下関係を嫌う指導者によって「タテ社会」崩壊の兆しがある。しかし、現実的には「タテの人間関係」はなくなることはないだろう。運動部に教育的意味を持たせている限り、学校教育という構造の中に運動部がある限り、教育的効果を無視することはできないであろう。また、運動部を維持・発展させるためにも積み重ねてきたものを無視することはできない。特に、久保が運動部の伝統とその伝承においては「タテの人間関係が重要な役割を担っている⁽¹⁷⁾」と言うように、運動

部と「タテの人間関係」は教育的意味や競技力の向上と切り離せないものである。

また、運動部において「ヨコの人間関係」も重要な役割を担っていることも無視することはできない。この「ヨコの人間関係」は運動部において学年単位やチーム単位の人間関係である。運動部に入部すると新入生は横一列の立場となる。そこから1年間は部内において最下級学年として様々な苦難が始まる。中には試合に出場する者、控えメンバーとして登録される者、まったく試合に出場できない者、またはAチーム、Bチーム、Cチームと選別される。しかし、彼らは能力によって地位の序列⁽¹⁸⁾はされても、1年生という地位から抜け出すことはできない。つまり、1年生としての部内での役割を担う義務を負うのである。例えば、練習道具の管理やグラウンド整備、試合や遠征における洗濯や食事の片付けといった雑務を引き受けなければならない。そして、そこには能力による地位の序列は無であり、1年生という括りでしかない。つまり、いくら試合に出場するような選手であっても、学年的「タテの人間関係」の中では、最下級生なのである。そして、1年生としての役割の遂行にミスがあった場合には1年生全員が連帯責任という形で、走りや丸刈りといった罰を与えられることもある。この連帯で責任を分担する行為はその集団の連帯意識を強化するための行為とされている。また、デュルケーム⁽¹⁹⁾の言う「集合意識」や「集団帰属意識」を強化する手段でもあり、「タテの人間関係」をより強固なものとするために、この「ヨコの人間関係」は必要なかもしれない。換言するならば、「ヨコの人間関係」は「タテの人間関係」を強化させるための手段となっている。そのため「ヨコの人間関係」を形成させるために連帯という形態をとり、さらに、集団への「帰属意識」や「われわれ意識」といったイデオロギーを強化させている。そして、それはある種、刷り込みであり、洗脳^(注4)とも言える。

5. 運動部における再生産の問題

このようにわが国の運動部は「タテ・ヨコの人間関係」によって複雑な様相を成している。そしてこの「タテの人間関係」の中で運動部において、伝統と呼ばれるイデオロギーが伝承される。この伝統の伝承こそが運動部における再生産と言える。運動部において再生産されるものは、その集団の規範や価値、そして技術や戦術など広範囲に及んでいる。すなわち、運動部にはその集団固有のルールが存在する。それは、E.ダニングが「スポーツが暴力の飛び地⁽²⁰⁾」と言うように、その運動部は儀式的・非日常的場となり、一般社会とは隔絶したルールを創り出している。

また、「ヨコの人間関係」では運動部という集団としての「われわれ意識」とは異なる「われわれ意識」が生じていると考えられる。「タテの人間関係」の中で学年を単位とする「ヨコの人間関係」の集団は、運動部内での役割を円滑に遂行するための一部である。すなわち、運動部内におけるミクロな集団での連帯、「ヨコの人間関係」の形成にすぎない。このような連帯は、上級生や集団から運動部内の規律や規範の強制、さらには理不尽とも思えるような要求に耐えるための防衛手段でもある。つまり、「ヨコの人間関係」は「タテの人間関係」の構成要素として位置づけられ、「ヨコの人間関係」によって「タテの人間関係」が支えられている。それは上級生が下級生を支配するために、意図的に「ヨコの人間関係」を強固にし、連帯意識を形成させてきたように思われる。また、この「ヨコの人間関係」は、一般的に「仲間」という語で置き換えられ、運動部の機能として、この「仲間」を作ること人間形成や競技力向上とともに重要な目的とされる。そのため、このように運動部では「タテの人間関係」によって「ヨコの人間関係」を形成させる機能もある。また、この仲間意識は、学年単位だけでなく運動部員全員によっても形成される。そして、その「仲間」こそがル・ボンが言う「最も高度な組織⁽²¹⁾」である。

しかし、このような人間関係の形成において、「われわれ意識」や「連帯

感」が高まる一方で、それらを形成する部員同士の距離感が問題となる。「つながり依存症」や「つながり恐怖症」という語に代表されるような「距離感覚の失調⁽²²⁾」は、集団における「われわれ意識」や「連帯感」を強くするが、そこにはお互いが信頼し合い本質的なつながりを結び得ていないことを示唆している。つまり、自分と他人が異なるということを理解し、お互いの間に距離があるということを受け入れなければならない。そして、異なる価値観をもった個が集まり集団を形成し、その中で共通する価値観を見出すことや、異なった価値観を持っていることを理解し、認め合わなければならない。今日引き起こされた大学運動部員の集団による犯罪行為はこの「負の連帯」ともいえる仲間意識が大きく関わっているように思われる。そして、そのようなことを引き起こさせないためには、運動部における再生産の構造のみを問題視するのではなく、再生産される内容を再考する必要があると考えられる。

6. 文化という再生産

運動部における再生産によって生じる問題は、構造的特性に見ることができる。しかし、運動部における、「タテヨコの人間関係」は現代社会におけるコミュニケーション不足による希薄な人間関係といった問題を解決する一助と成り得るかもしれない。それは、運動部における再生産の構造によって、「われわれ意識」や「連帯意識」を高めることで他者との距離を近づけることができる。また、運動部の規律・規範や技術や戦術に関わる指導は、運動部の伝統や文化の伝承という意味において再生産の機能を果たしている。しかし、一方で、このような再生産の機能は「タテの人間関係」において暴力や体罰にも同様な機能を持っている。それは、暴力や体罰を受けた選手が指導者となり、暴力や体罰を振るう。そして、そのようなことが繰り返し行われることで、そのような指導者に指導された選手は、

体罰や暴力を否定することなく、逆に暴力を必要悪だととらえるようになる。高橋の調査⁽²³⁾では「体罰は必要である」、「自分たちが悪いんで仕方ない」と言うような意見を持ち、将来指導者となった時には、暴力を必要悪とし、体罰や暴力を教育的手段として行ってしまう危険性がある。

また、保健体育科の教員を養成する大学では、いわゆる保健体育教員として社会化された、もしくはそのような資質をもった者を意図的に集結させているのではなかろうか。そこには松田⁽²⁴⁾が言うような「体育教師のイメージ」を受け入れた者や、体罰を教育的手段、もしくは教育的指導の一環と考える者など、比較的体罰や暴力に対する嫌悪感を持っていない者が多いのではないだろうか。

さらには、指導者の進路指導には自らの出身大学に進学させる者を選定し、その大学の知的レベルだけでなく、文化を受け入れられるか否かを見極め、進学させているのかもしれない。ある大学に進学させ、その運動部に入部するための前段階として、選手の特長や指導者や家族などの周囲の環境が影響力を持っているのではないだろうか。すなわち、進学先の運動部の特長や指導者の教育方針といったイデオロギーを理解することが重要な決定要因となっているように思われる。それは、運動部という集団である一定のイデオロギーを教授しやすくするものでもある。つまり、集団の統率を図る上でその集団に社会化させやすくするためには、個人的属性は重要な要因の一つである。そして、運動部における伝統の伝承は、運動部における文化の再生産構造へと変わっていく。また、再生産の機能を円滑にするために、その集団に入ってくる者は、そこで行われる機能に対応できる、もしくはそのような資質を持ち得ているのかもしれない。換言するならば、運動部における再生産には教育水準や家庭教育の水準がある特定のレベルの者を選別していると言える。大学に入学し、運動部に所属するためには、大学入学の基準をクリアし、運動部に入るための技術の基準をクリアし、さらにはそこで教育を受け、部活動を行うための経済的基盤が

必要となる。つまり、大学運動部に所属するためには、これらの水準に達する必要がある。そして、それらの、水準に達し、運動部のイデオロギーを受け入れられるごく少数の限られた者による集団を形成する。それは、運動部の再生産が必然的に行われる構造を作り上げていることを示唆している。荻谷⁽²⁵⁾が教育における再生産において階層や階級が重要な要素となっていると言うように、運動部も同様にある特定の階層やイデオロギーを持った者によって形成されており、そこで、運動部の文化の再生産構造を作り上げている。

7. まとめ

このように、学校運動部における「タテ・ヨコの人間関係」とそこに所属する部員の特性を述べてきた。そして、そこで問題となることは、運動部における再生産構造によって、上下関係に関わる体罰や暴力行為から「ヨコの人間関係」に関わるいじめや集団による犯罪行為へと変化し、あらたな弊害を生みだしたことにある。運動部における教育的効果は、スポーツの教育的効果と同様に人間教育において重要な役割を担っていることは疑いのない事実である。しかしながら、近年引き起こされた日本体育大学サッカー部による集団キセルや国士舘大学サッカー部による集団淫行事件、京都大学アメフト部の集団準強姦事件、関西大学野球部による集団暴行事件はまさに起こるべくして起こった問題と言える。それは、わが国の運動部の特性とも言える再生産構造の弊害として引き起こされたのである。運動部の再生産構造において「タテ・ヨコの人間関係」は、伝統の伝承や教育的・競技的指導を可能とする「タテの人間関係」、「タテの人間関係」を成立させるためや集団としての「われわれ意識」や「連帯感」を高めるための「ヨコの人間関係」である。しかし、その「ヨコの人間関係」において集団への帰属意識や連帯感が集団の犯罪行為を引き起こした。ル・ボンは集団の特性⁽²⁶⁾として意識的個性の消滅、無意識的個性の優勢、暗示と感染

とによる感情や観念の同一方向への転換、暗示された観念をただちに行為に移そうとする傾向を挙げている。また、スポーツ・ファンの行動に象徴されるようにファン集団の暴徒化、いわゆるフットボール・フーリガンの問題のように、集団における個人の抑制は、集団の方向性に吸収されてしまう。それは「赤信号みんなで渡れば怖くない」という冗談めいた言葉に象徴されるように、犯罪行為に対する罪悪感や嫌悪感よりも、本能的欲求や集団行動への同調が勝ってしまうのかもしれない。

また、大学運動部に所属する学生は、個人的資質や生活環境、さらには経済的側面においてもある一定の階層に所属している。彼らには、所属する大学の知的レベルや運動部の技術レベル、そして経済的レベルにおいて許容できるレベルにある。彼らは大学教育や大学運動部の規律や規範など様々な指導を受け入れられる資質を備えて大学や運動部に足を踏み入れる。そしてそこで行われる、イデオロギーの注入ともいえる伝統の伝承を受ける。それは、洗脳や刷り込みと似たようなものなのかもしれない。

このように大学運動部では「タテヨコの人間関係」を基盤とした構造があり、また、そこに所属する部員は、大学運動部に所属できるよう社会化、もしくは準再生産されたものである。そして、この再生産の構造は、運動部内にとどまるものではなく、様々なところへ広がっているのかもしれない。運動部に入学した学生は、上級生や同級生から運動部の文化を学び、それを下級生へ伝えていく。そして、大学卒業後には、スポーツに関わる指導や教員として生徒を育て、そこで同様な仕組みを作り出すのかもしれない。もしくは、そういった再生産構造の中へ送り出していくのかもしれない。しかし、そこで学んだ学生はいずれ文化の受け手から文化の発信者へと変わり、再生産が行われていくであろう。それは、「エッサッサ」が中学校や高等学校の体育祭などで行われるように、文化の踏襲を続けていくとともに、再生産構造の中で他者との人間関係を築き、人格形成や人間形成に寄与していかなければならない。また、わが国の文化や伝統を永

続的に再生産するように、運動部固有の文化や伝統を再生産することも必要なことなのかもしれない。

注

(注1) JFL：ジャパンフットボールリーグ、1999年から始まった日本におけるサッカーリーグの一つであり、日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）と地域リーグの間に位置するカテゴリーである。日本サッカーのリーグ構成において3部に相当する。財団法人日本サッカー協会と一般社団法人日本フットボールリーグが主催する。

(注2) エッサッサとは日本体育大学で伝統的に行なわれている応援スタイル及び運動のこと。大学生活において、新入生特別活動（前期授業の一環）で徹底的に教えられる。習得した後は各部祝勝会等で凱歌として披露される事が多い。

大正時代後期に各学校でスポーツ応援が盛んとなり、東京高等商船学校（東京商船大学の前身、現東京海洋大学）の応援歌「錨をあげて」や東京農業大学の「青山ひとり」などに対抗するスタイルのものを求めて、前身の体操学校在校生の師範科生平井一氏が考案した。当時、アメリカから導入された「ピストン・ロジ・アームモーション走法」を参考に、掛け声を「エッサッサ」と定めたことに始まる。その後、エッサッサは学生寮（学校寮）にて脈々と受け継がれ、進化して現在の形になった。

同校卒業生が体育教師として着任した全国の一部の高等学校や中学校にも広まり、運動会などで男子のマスゲームの一環として披露されることがある。参加者が千人以上ともなれば壮観であり、それ以上の大人数となれば地面が揺れるとまで形容される。一般的に上半身裸、裸足のスタイルで行う。肉体の美、精神の美（雄たけび等）、集団の集合離散の美を追求する。なお、横浜健志台キャンパスには元日展

審査員で著名な故井上久照作（2009年2月逝去）の「エッサッサ像」が建立されている。

（注3） 大学においては愛好会、同好会、一般サークル、指定サークル、強化サークルなど体育会を中心とし学内で位置づけ、一般的に立ち上げ当初は愛好会からスタートし、活動実績や組織の成熟度によって段階的に昇格していく。

（注4） 特別な環境のなかで一貫した徹底的な教育を行うことによって、今まで持っていた思想や信念を植えつけることをいう⁽²⁷⁾。

文献

- （1）谷口源太郎「スポーツを殺すもの」花伝社，2002年，120頁。
- （2）中根千枝「タテ社会の人間関係」講談社，1967年，75頁。
- （3）同掲著(1)，119～120頁
- （4）高橋豪仁，久米田恵「学校運動部活動における体罰に関する調査研究」
「奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 Vol.17」2008年161～170頁
- （5）池田昭「新社会学辞典」有斐閣，2006年，1049頁
- （6）新村出編「広辞苑第四版」岩波書店，1991年，1789頁
- （7）久保正秋「運動部集団と原理的考察－伝統とその伝承の原理－」「東海大学紀要体育学部」1980年，12頁
- （8）近藤英男「クラブ活動と伝統の問題」「体育科教育13巻，11号」1965年，16～18頁
- （9）同掲著(1)，p119
- （10）池田潔「自由と規律－イギリスの学校生活」岩波書店，1949年，103頁
- （11）ギュスターヴ・ル・ボン 桜井成夫訳「群集心理」講談社，1993年，26頁
- （12）玉木正之「日本人とスポーツ」NHK出版，2001年，27～36頁
- （13）木村真知子「迫られるスポーツによる大学の地域連携」「変貌する大学スポーツ現代スポーツ評論14」創文企画，2006年，79頁
- （14）山本順之「大学におけるスポーツの役割」「九州国際大学社会文化研究所

紀要第64号」2009年，90～92頁

- (15) 土居健郎・渡部昇一「いじめの構造」PHP研究所，2008年，64頁
- (16) 荒井貞光「クラブ文化が人を育てる―学校・地域を再生するスポーツクラブ論」大修館，2003年
- (17) 同掲著(7)，17頁
- (18) 同掲著(7)15～16頁
- (19) E.デュルケーム著・田原音和訳「社会分業論」青木書店1975年，81頁
- (20) E.ダニング著・大平章訳「スポーツと暴力に関する論文」「スポーツと文明化―興奮の探求」法政大学出版局，1995年
- (21) 同掲著(11)，207頁
- (22) 菅野仁「ジンメル・つながりの哲学」日本放送出版協会，2003年，242～243頁
- (23) 同掲著(1)
- (24) 松田恵示「体育とスポーツ」「スポーツ文化を学ぶ人のために」世界史思想社，1999年，189～192頁
- (25) 荻谷剛彦「階層化日本と教育危機―不平等再生産から意欲格差社会へ」有信堂高文社，2001年
- (26) 同掲著(11)，35頁
- (27) 矢沢修次郎「新社会学辞典」有斐閣，2006年，899頁